

松浦佐用媛石魂錄

前編

貳

6-60002

986.4
3-2

立川図書館
平成
6.10.31

南川
藏書

松浦佐用媛石魂録前編中卷

東都 曲亭馬琴編次

第四

詩歌 吟咏 處女 舌戰 走

博多彌四郎素延はかたやしろもとのの思おもひもかけず。驟はいかの仰うやと稟うけて。心こゝろの中うち安やすうらす。いそぎ宿所しゆくじよは立歸たとかへりく。秋あき布ぬいに執權しつけんの仰うやと聞きえあらし。御身おんみ鼠川ねづがわ長城野等ながきののに。怨うらみと締ひびし事はことかた敷かたし。彼等かれら今いま大人氣おとなげおおく。事をこと好このみく。かゝる條じょうを申し行ゆふ事こと。故ゆゑこそあらめど。吟うたハ。秋布あきぬいあはし。尋思しんし一つ。この事こと是こゝろは故ゆゑふたし侍はべらす。曩さきは嘉二かじ郎らうがみづうら来きたつ。和歌わかと需もとたるとた。あまりに無禮ぶらいなりし。り。それ宛あてつけて。箇様かやうの歌うたと詠よめて。とせ侍はべり。是こゝろを也いか合あて。さし申し行ゆふ。おん。此この外ほかは。絶たえて思おもひよ走る事ことも侍はべらすといふ。彌四やしろ郎らう聞きて。やうやく曉得さとり。これあり。嘉二かじ郎らうは元米無學もとよりのむがくの俗人ぞくじんかれども。兵太ひやうたは。頗まことに才學さいがくありとおぼし。あうるは。彼等かれら交まじを厚あつくして。兄弟あなづかひの思おもひとあせバ。必かならず心をひとつふし言ことと巧たくみとして。御身おんみと取はめんとする。

よこそ御身よくなれどざくれをきて。此禍と惹出給へりて。頼は肩根とよせよけり。されど秋布は騒ぎさる氣色ぬく。父上深くお思ひく給ひて。さうい未だ兵太とやらんとあり侍らねど。嘉二郎と親く交る程のもの取らば。其友と見て。心の底の深た淺さも。推てあられ侍るやうし。よーやどが身。彼人は及ずとも。女子の事なれば。父の恥ふあらず彼も。己らふ負たらんふい。世の胡應ふ侍りふん。機ふ臨み變り應じ。既全く勝得ずとも。全く負べうは思ひ侍らむといふ。彌四郎の心をと取れど。斯て已べきふあらざれば。もつばら其準備をいさへたる。時弘安三年十一月十五日。北條相模守時宗朝臣。今日建長寺に于て。長城野兵太教宗と。博多彌四郎が女兒秋布が。才學の程を試み給ひんとて。豫てその用意あり。判者の執權の母公南殿。并に彼寺の開祖。大覺禪師と定られ。客殿の西を女房として。翠簾伏懸じさし。こゝに南殿の茵伏儲。東は男房として。幔幕試ひきこさ。こゝに禪師の椅子と置。一山の法師ばら。執權家の有司の男房に著坐せ。抑巨福山建長寺のいぬる建長五年十一月廿五日。前執權時頼朝臣これ建立し。大覺禪師は開祖とに禪師

諱は道隆。元是異朝。宋國の人よして。後嵯峨院の寛元四年に米朝せり。すぬらち遠唐二十五世の法孫よして。道德世ふ比お。齡八十にあまれども。堰として童顔あり。この聖僧禪機の要道。試得給ひさるのミおらず。博覧よして詩文よし。こゝ試もて時宗朝臣。強て今日判者ふ宛られたり。うくて南殿の己の比及ふ。博多彌四郎が從弟倍太郎素久以下。影の女房たちと將て。建長寺に入采あり。知客の老僧これと迎。客殿の次の間迄。輪と并入さされば。南殿こゝより輪と出。設の席に著給ひ。倍從の女房を主の後方。居並びたり。其時大覺禪師は。二人の從弟を將て。南殿に對面し。こゝられて男房の上坐。著給へば。時宗朝臣の名代として。内管領長崎平左衛門尉頼綱。大紋の袖に充あひ。禪師の次。坐し申次の雜色に。二行ふこゝられて。末坐あり。又注進の武士六七騎。馬を山門のほとりに立。事の爲体を。主君に告まうさんとて。袴のろは高くとり。今うくと待居たり。さる程。小書記の僧。磬を鳴らほこと。三杵ふ及て。鼠川嘉二郎の。長城野兵太を將て。東のうとより入り。博多彌四郎は。秋布と將て。西のうとより入り。おのく南殿と拜し奉り。又禪師と拜して對坐

せバ。雜色二人。料紙硯とて求りて。其母とりに居る時。長崎平左衛門頼綱。兵太秋布等に
 對ひて。執權の仰と傳へ。法令五ヶ條を讀あげたり。ろの略。第一。禮儀と亂るべうらむ。第
 二。喧嘩すべうらむ。第三。最良の輩。助言をべうらむ。第四。筆戰三回。所謂詩和歌連歌是を
 り。まふち執權御母子より題を給ひり。其さびく。是と聞きて。速ふ筆と下をも。其勝
 とは。是筆試もて其才を。戰を致故。筆戰といふ。第五。舌戰二回。これハ互ハ和漢の故實
 試問答。その才と戰を致ともて舌戰と稱ふ。條目をべて斯の如しといふ。其景迹。江湖の
 場に異ならず。頼綱ハ件の箇條と讀果て後。粉塗。試金ふてだみと。手箱。試開て。詩の題。試
 どり出を。試。申次の雜色受どりて。兵太秋布に。日うち與れ。兩人等。く押。藏。て。開。見
 る。小門字の謎と記されたり。この門の字と明白。い。い。を。して。謎もて。賦。を。難。題。な。れ。兵
 太。忽。地。迷。惑。去。く。沈。吟。や。久。し。と。雖。も。終。ふ。其。趣。向。と。得。む。秋。布。ハ。深。く。紫。入。と。る。氣。色。も。あ。く。
 さ。ろ。く。と。書。つ。け。て。さ。い。出。ま。と。雜。色。と。り。次。て。頼。綱。ハ。通。せ。バ。頼。綱。是。を。禪。師。に。呈。ま。禪。師。を
 近。い。ち。高。や。う。に。吟。給。ふ。其。詩。ふ。

門字謎

惜花 間 紅 日 西 墜

閑 朱 戸 不 見 多 才

倚 關 千 東 邊 隱

閑 無 心 懶 傍 粧 臺

禪師判て云。花間。惜む。紅日。の西。墜。こと。と。と。間。といふ。を。字。眼。と。は。間。といふ。字
 の。日。を。墜。と。た。い。これ。門。の。字。なり。朱。戸。を。閑。て。多。才。と。見。ず。と。は。閑。といふ。を。字。眼。と。は。閑。と
 いふ。字。の。才。と。見。され。バ。これ。又。門。の。字。と。な。れ。閑。千。ハ。東。邊。隱。々。と。は。閑。千。の。閑。と。字
 眼。と。を。閑。といふ。字。の。東。か。く。と。さ。い。これ。も。又。門。と。な。れ。閑。て。心。なき。も。粧。臺。ハ。傍。ハ。懶。と
 は。閑。といふ。を。字。眼。と。を。閑。といふ。字。に。心。な。れ。と。さ。は。これ。も。又。門。の。字。ハ。斯。の。ご。と。く。四。句
 の。中。に。門。の。字。四。箇。と。隠。して。義。理。分。明。實。ハ。妙。作。と。稱。賞。給。へ。バ。か。の。く。深。く。感。ず。て。已
 ず。兵。太。既。に。負。け。れ。バ。嘉。二。郎。頻。ハ。焦。燥。て。潜。ふ。そ。の。背。と。敵。て。催。促。を。致。す。兵。太。ハ。只。さ。い
 俛。き。て。應。せ。ず。秋。布。第。一。番。の。詩。作。ハ。勝。ぬ。と。聞。え。う。ら。バ。注。進。の。武。士。一。人。馬。ハ。閃。々。と。う。ち
 騎。て。鞭。を。鳴。ら。し。足。搔。と。え。や。め。執。權。の。館。を。斥。て。暮。直。ハ。馳。去。け。り。さ。て。今。度。ハ。和。歌。な。れ。バ。南

殿より歌の題と出給ひと註が。一字題二字題ふありをりて。紀州の郡七ツと歌の中よ
 よみ入れと。とあり。これいぬる夏秋布が。和歌の浦よいとぬほても紀の國や。と詠たり
 し。秀逸と思ひよして。今此難題と出給ふなるべし。紀州の七郡は。伊都郡。那賀郡。名草
 郡。海部郡。在田郡。牟婁郡。是なり。是と三十一字に詠入れん事。容易あらざれば。兵太の
 頤の思案及べむ。心くるしく見えたるふ。秋布のえや詠得たりと。おぼしくて。墨搦が
 などするふ。嘉二郎の心。慌頻ふ。咬去と。促せども。兵太の遂ふ趣向と得む。秋布纏書とい
 りて。短冊をさしかけ。博多倍太郎坐とちて。是をとり次。南殿ふ進るを註を。文臺ふ受
 乘して。讀あげ給ふ。其歌ふ。

伊都那賀夜の名草は海部在田へ日高ん牟婁住バヤ

三十一文字ふ七ツの郡と詠入れと。歌の心明おれば。南殿の云も更ぬ。人み舌と吐て
 感吟。注進の武士ふ斯と告て。件の詠草を遣與せし。一人馬ふうち乗て。飛が如くに走
 りぬ。さる程ふ長城野兵太。歌合ふも負され。心いよ。燃るが如く。嘉二郎の最本

意なきに。恨まげに長城野とうち見やりて。まバ。嘆息まさりけ。うくて。第三番ふ及び
 て。筆戦は是限りぬ。今度の連歌ふてありし。長崎頼綱席と進めて。

目がれせぬ夜と誰があれたの月

といひうけたり。時ふ秋布解ふ應て

花ふくも註日もあるものとえ註といへ

とつけと。亦これ當意即妙ふ。目がれせぬ夜の飽もせぬと。誰があれたの月といひそめと
 註。と云とうけて。花ぐもりを註日もある。え註と云が如くとつけて。春ふ暗るるとうけて
 いへり。申次の雑色。この連歌と書つけて。騎馬の武士ふ遣與しければ。第三番の注進。馬ふ
 拍いれ。宙と飛いて馳行。ここにいとつて。長城野兵太。三度の筆戦ふ負し。頼綱最
 苦々まき氣色ふ。嘉二郎兵太と見うへり。おの。斯事と好きて。よくなれた條と聞えあ
 げ。いひがひえなく。三五の未通女に詠伏せられ。巧拙を且く聞て。一首半句も連ぬるに及ば
 る。以の外なる越度ふこそ。と恥まむれば。兵太潜に冷咲て。文人才子に遅吟あり。又早吟あ

り。左思さしが三都さんとの賦ふ。十年じゅうねんの苦心くしんと積つみて。初はじめて成説せつせつ。彌衡やこうが鸚鵡おうわの賦ふ。草稿そうこうと更かへむ。て。即座そくざに章せうとふせり。然しかれども何いづきと勝まさり。何いづれと劣おとるとせむ。某もが元采げんさい王粲わうさんが宿構はらかの職しやくと恥はづる故ゆゑ。卒爾あかまさまに筆ふでと下くださむ。こゝともて遅吟おそんなり。えー舌戰ぜつせんして一問答ひともんたうせば。絶たえて口くちと開ひらけ候まうわと云いふ。嘉二かじ郎らうをふは陪あやがら。さりととも思おもひうへして。やゝ顔色がんしよくとふはしけり。類綱るいこう聞きて。さうば問答もんたうあるべしとて。舊もとの席せきに歸かへり着つけば。執筆しきつ二人ふたり左右さゆうふりうれて此この問答もんたうを記きさんと用意よういをるふ。嘉二かじ郎らうの心こころの中なかにあふる。神かみと祈念ねんあつ。兵太ひやうた元げん一世いっせの濟き沈ちんこゝにありと思おもひうへば。氣きと勵げんして秋布あきふふ對むかひ唐山たうしんの經書けいしよ史傳しでん。最いむづうけきば。女子おんなの預あづけらぬ事ことなればとて。知ちずともいひ脱だつき給たまはぬ。より最いだだ所ところと問とべし。今日こんにち内ない管領くわんりやうともて。執權しつけんの名代なやうだいと給たまふと聞きゆ。此この名代なやうだいと云いふ事は。古語こごう俗語ぞくごう。何いづれの時ときふいひ出いでせる。答こたへ給たまへと詰問ちつもんふ。秋布あきふ微笑びせうて。こゝ今の俗語ぞくごは非あやま。いとゆるくより云いふ事ことと見みえて。古事記こじ仁徳にとく天皇てんわうの紀き。大后たいこう石いし之日賣命ひめのみことの御名代みかやうだいとして。葛城部かつらぎべと定さだむ。太子たいし伊耶本いよほん和氣命わきのみことの御名代みかやうだいとして。壬生部にぎひよを定さだむ。水齒列命みづはらへの御名代みかやうだいとして。岐部きべを定さだむ。大日下王おほひくさかべの御名代みかやうだいとして。大日下部おほひくさかべと定さだむ。若日下王わかくさかべの御名代みかやうだいとして。若日下部わかくさかべを定さだむと侍はべり。うまれバ名代なやうだいといふ事ことは。仁徳にとく天皇てんわうの御時みときより已前いぜんに。云いふて来きたれる取とりて答こたへば。兵太ひやうたの忽たち地ちに閉へい口こう。幾いくがさくと思おもひたる。秋布あきふ重ねて。さうにも又また似につういへく。淺あさた處ところと問と參まらをべし。彼首かしかの屏風びやうぶに。小鳥影こどりかげを畫かきたり。然しかる。鳥とりふめの字じとをえし稱なづるもの。をまめ。はむくろめ。ひがらめ。山やまがらめ。四十よじうろめふんどなり。すまめとつむめは。今いまもめの字じとをえし呼よび侍はべれど。ひがらめ。山やまがらめ。めと省はぶたし稱なづ侍はべり。此このの字じは義理ぎりをいう。ある事ことにて侍はべると問とふ。兵太ひやうたを眼まなこと睜かは。口くちを開ひらた。答こたんとする。云いふ所ところを知しず。數回あまた咬かいて。漸おそくに云いふ。物ものは名なづくる事こと。悉ことごとく故ゆゑあるにあらず。是等これらにあほりに淺あさた事ことおれば。未いまど考かんがはりといへば。秋布あきふうち晒あか。古いにしへの人ひと。必ず物ものに名なづくる事故じこあり。名正なただしうらざれば。事こと行なきと云いふ。さてはすまめ。つぱくろめの義理ぎりと。あらでやといをる。といせもあへむ。兵太ひやうたに赤せきさちて。これ實じつに淺あさたなる事こと。心こころと用もちひむ。其故そのゆゑあらば解と給たまへ。いて聞くべし。といははけ。秋布あきふが云いふ。すまめ。はむくろめ。ひがらめ。ぬんでは群むれと飛と小鳥こどりなるともて。

王わの御名代みかやうだいとして。大日下部おほひくさかべと定さだむ。若日下王わかくさかべの御名代みかやうだいとして。若日下部わかくさかべを定さだむと侍はべり。うまれバ名代なやうだいといふ事ことは。仁徳にとく天皇てんわうの御時みときより已前いぜんに。云いふて来きたれる取とりて答こたへば。兵太ひやうたの忽たち地ちに閉へい口こう。幾いくがさくと思おもひたる。秋布あきふ重ねて。さうにも又また似につういへく。淺あさた處ところと問と參まらをべし。彼首かしかの屏風びやうぶに。小鳥影こどりかげを畫かきたり。然しかる。鳥とりふめの字じとをえし稱なづるもの。をまめ。はむくろめ。ひがらめ。山やまがらめ。四十よじうろめふんどなり。すまめとつむめは。今いまもめの字じとをえし呼よび侍はべれど。ひがらめ。山やまがらめ。めと省はぶたし稱なづ侍はべり。此このの字じは義理ぎりをいう。ある事ことにて侍はべると問とふ。兵太ひやうたを眼まなこと睜かは。口くちを開ひらた。答こたんとする。云いふ所ところを知しず。數回あまた咬かいて。漸おそくに云いふ。物ものは名なづくる事こと。悉ことごとく故ゆゑあるにあらず。是等これらにあほりに淺あさた事ことおれば。未いまど考かんがはりといへば。秋布あきふうち晒あか。古いにしへの人ひと。必ず物ものに名なづくる事故じこあり。名正なただしうらざれば。事こと行なきと云いふ。さてはすまめ。つぱくろめの義理ぎりと。あらでやといをる。といせもあへむ。兵太ひやうたに赤せきさちて。これ實じつに淺あさたなる事こと。心こころと用もちひむ。其故そのゆゑあらば解と給たまへ。いて聞くべし。といははけ。秋布あきふが云いふ。すまめ。はむくろめ。ひがらめ。ぬんでは群むれと飛と小鳥こどりなるともて。

めの字とそえて呼び侍り。むれの約。めとなる故あり。さればすゞめ。すゞと鳴て群る鳥な
 れば。すゞめと名づく。つむくらめは。土と食ひて。是も群る鳥なれば。はむくらめと稱ふ。つ
 ぱくらめ。つちくらふの略稱。それをおほ略して。つむめとも稱侍り。ひがらめ。山がら
 め。推て知さまへうーと云ふ。兵太をおほ負し魂を逞して。小膝と進めらめ。それよても
 あるべし。然らばうぐひを。ほととぎを。きまを。うらまなんどは。をの字とそえて呼べり。又
 虫まきりぐすあり。是等も深た故ありやと問ふ。秋布答て。件の鳥どもは。粟とくふ事の
 眞實やうなれば。すの字とそえて呼び侍り。うぐひまの。愛食粟よて。うれしく粟と食ふの
 謂なり。又右とまぎまきをの。子ま。稱美の謂。彼が鳴聲の。ほととぎと聞ゆれば。ほ
 ととぎすといふ。是ほととぎをの。おと略せり。うらまをうらうらと鳴ともて名づけ。ま
 ぎまのけんくと鳴をもて名づく。うきくけこと通て。まと云もけと云え。其意の同。又ま
 りぐまの。草葉にまどく虫なれば。その字状そえて呼歟。粟とまどくと訓。まゆを約まば。
 まとふればなりと云。其論水の流るゝが如く。露むりも委ふければ。兵太の玉を汗と流

一最朽をくは思へども其才敵がくければ。是まきへ負てげり。斯て執筆二人。此問答と
 書留め。騎馬の武士状もて。時宗朝臣に注進し。舌戦。二回。こゝに事果たりけま。博多彌四
 郎。漸くに安堵て。最敵一げ見えさる。嘉二郎。妬く思ひて。頬のあさり状ぬくように
 ちつ。ひとり潰るといへども。絶く其かひあ。かくて南殿の。秋布を近く召て。今日の事。思
 ひしよりの教群ぬり。世は比なき才女う。相州も聞給の。さころ感おほをべしとて。只
 顧褒賞し給へ。禪師。頼綱。倍太郎以下の輩も。又これを褒て已む。只鼠川と長城野の。い
 よ。胡應とぞなりにける。さる程。南殿の。大覺禪師。別と告。秋布を將歸り給へ。博多
 倍太郎。同。彌四郎以下。夥の女房。先方後方。附あさひて。輪。乘。參。せ。平左衛門尉
 頼綱。少引下りて。兵太。嘉二郎等と伴ひつ。執權の館へぞ參りける。

第五

才を福で讒奸罪せらる

此日時宗朝臣は。近臣等が注進よつ。秋布兵太が勝敗と。よくしりてねいせ。が申下
 刺ふ及て。南殿の。秋布等と將て。建長寺より歸りたまひ。直。時宗朝臣。對面あつ。其日

の爲体と。おちもぬく物がさり給へば。相州大は感悦あつて。項日の鬱胸と。やゝ聞きぬと
 宣ひたり。浩庭は長崎平左衛門尉頼綱の。鼠川嘉二郎。長城野兵太伏俱して歸り来つ。ま
 ぬち秋布が詠草と呈上を。其時時宗朝臣の。嘉二郎兵太とあべしほへ。此愚物何の
 面目あつて。再びこれ見ゆるぞ。云事あらばいへ聞ん。といたまは高く責給へば。件の二人
 は背は冷た汗と流し。席薦は頭と搦著て。一言半句も回答とせむ。時宗まましく怒て頼綱と
 見うへり。嘉二郎兵太は。豫てよりぬ行ひありと聞えしうど。格外の憐愍状もて。是非の
 制度は反ざりし。這奴等おほ己をあらむ。才と福で上と蔑を。其罪最重うらむを。今の許が
 ごとく。とくく追拂ひ候へど。仰もあへぬ。頼綱はとよりて。嘉二郎が頭髻をうい。翹ミ扇と
 もつて。丁々と打をえつ。聲をぬり立ていへりける。汝が年采の惡行。已れ屢々教訓状
 加さりし。露バウリも用ひざれば。已ことを得む。内々幾絶まを。雖も怒は叔姪の因に脱ぎ
 す。共は面目と喪へり。えし聊も恥とあり。其首と纏給ふ。君恩の鴻なると思ひあらば。水
 もも沈み。火もも焼きて。人に見らるゝと取られ。罵り。矢庭は兩刀ともぎとつて。搦より撲

地と突落せば。博多彌四郎。又執權の仰を禀て。長城野兵太が大小の刀を搦とり。是とも庭
 へ突落しぬ。寔なるうぬ。檜山の火の。檜より出て。遂は檜と焼といふ。今この兩人が奸計も
 又然り。是と慎よ。是と慎よ。汝より出さるもの。汝は返るものなりと。曾子のいへるが宜
 かりける。さる程は奴隷等の。答をとつて。嘉二郎兵太は催促し。日未憎しと思へば。隅春
 の嫌ひかく。或は打。或は罵り。只願ふ違たて。庭門より走らしたり。うくて時宗朝臣の。秋
 布に砂金十兩を給ひり。南殿より小袖一襲と賜り。又建長寺へ。博多倍太郎と使者と
 て。大覺禪師へ。影の謝物状贈りたまふ。秋布は。是日の首尾残る所もかく。剩過分の
 一う。南殿のまましく。秋布は愛おほしつ。次の年の春のころより。父の彌四郎と見給ふ毎
 に。豫ていひつる婚縁のいりよぞや。瀬川吉次と婿ふどりて。あへて不足もあらはなど
 宣ふ。彌四郎長て。女兒もや。十六歳ふあり候へば。迷うらす媒妁状もつて。吉次ふい
 りせ候べし。と應奉りしが。公務暇なくて。その年も半のいさづらに過しつ。漸く秋の季ふ



丹精言葉集之四
長崎三津浦

至り。親族ふればとく。博多倍太郎と媒妁ふとのみて。瀬川采女吉次に婚縁の事といはるる。事故なく整へらば。まぬいち黄道吉日は擇み。秋布は瀬川が宿所へ送る。遣へ。婚姻とどり締ぬ。元彼秋布の。心ざほの風流さるのさぬ。夫ふ齊肩て操箒真しく。奴隷は憐し親族は睦みて。よく内とおさめければ。吉次深く歡び。借老の契最深。活處。九月中旬ふ至りて。京都の守護。北條治部大輔義宗。泰時の孫重時の二男。同左近大夫時國。時房の孫。義政の嫡男。この兩大將。京都六波羅ふありゆゑに。兩六波羅と稱ふ。執權時宗の親族へ。よ。鎌倉へ飛札到來。其故を尋れば。太宰府の守護。平經高の。曩に謀叛の聞えあつて。滅さり。北條時輔。時宗の兄。文永九年謀反ふよつ。京都ふて誅せらる。不寛あるものな。一。時輔退治の時。軍功あり。よつて。や。心驕。九ヶ國の成敗。放。一。國司の所領と押奪ひ。牛淵九郎清繩と云ものを軍師として。俄頃謀叛を起せ。一。白杵河野が徒。是ふ與。京鎌倉と攻。一。經高武家の執權たらんと計較め。これふよつて。松浦景隆。大友藏人。菊池原田など。經高と合戦。一時。雌雄と決せん。とせる處。

牛淵九郎清繩の軍船と造らし。肥前國平戸嶋は押渡。牛角の勢と張り。其機變極り。あしと聞ゆ。いそぎ討手とさし向給。ゆゑ。し。九大事。ぬるべしと書たりける。時宗一覽あつて。俄頃一族の大小名。内管領頼綱以下の頭人評定衆と召集。兩六波羅の連署と披露して宣ひける。往。時輔謀反の時。西國の逆徒。忽地。亡し。經高一人の功。あらず。時宗が洛の敵を討。に。よ。れり。あ。るを。經高武勇。小。誇り。京鎌倉を。亡。え。く。浮雲の。富貴と極ん。とい。さ。ま。も。天。争。り。許。を。べ。た。天。慶。の。純。友。の。威。と。九。州。に。振。ふ。と。雖。も。身。死。し。て。葬。る。ふ。地。を。一。況。て。や。經。高。を。や。今。一。員。の。大。將。を。さ。し。向。ふ。一。舉。を。減。ぶ。べ。し。と。宣。へ。み。を。諸。と。も。ふ。仰。理。は。覺。候。と。ぞ。應。ける。其。時。時。宗。朝。臣。を。坐。中。と。倍。と。見。廻。り。て。秋。田。城。二。郎。實。政。と。近。く。招。け。今。日。よ。り。足。下。と。も。て。鎮。西。の。守。護。と。す。べ。し。い。ろ。ぎ。肥。前。國。へ。發。向。り。て。ほ。づ。牛。淵。と。討。は。へ。牛。淵。に。亡。な。ら。ば。經。高。の。旭。に。向。ふ。霜。の。如。け。ん。と。く。く。出。陣。あ。る。べ。し。と。い。を。が。い。て。聽。て。上。總。介。に。任。ぜ。ら。る。實。政。是。と。承。り。諸。國。の。軍。勢。を。催。促。せ。ば。事。遅。々。に。及。ぶ。べ。た。り。只。實。政。が。手。勢。と。す。ぐ。つ。つ。今。夜。由。比。が。濱。よ。り。船。と。出。候。ゆ。め。願。く。ば。文。學。武。略。に。長。さ。る。もの。を。

一人属られて實政が輔とささめ給へうと申はふ。時宗もバシ尋思あ。近臣瀬川采女吉次の年おは弱けきど。忠義拔群ふいて。智勇双なきものなれば。此男を將てゆたさまへ。吉次の目今こおさよりいひ知し候べし。と宣へバ。實政斜なを歡んで領掌し。忙しく宿所立歸りて。老黨草野三郎等に縁由を説知し。今夜月の出る比及。繩と解べしとて。とるものもとりあへせ。西國出陣の用意あつ。手勢都合二百餘騎。由比が濱よく着到と記さし。八九艘の大船より乘て。其日の暮るを待たりける。この實政は。時宗朝臣の曾祖なりし。北條泰時の弟。龜谷實泰の嫡男。稱名寺實時の二男に。執權の氏族多る中に。已た親した人なれば。時宗これと擇出して。鎮西の守護と。をぬち上總介に任じて。高連討の大將とさし給へり。げは時宗の目鑑を違はせ。實政只半日之間。軍装して。鎌倉と船出せる事。人の及がた所ありとて。親も跡も。嘆賞ざるにありしとぞ。此日瀬川采女吉次の出仕せざるをもて。彼件の事を知ず。秋布と娶てより。や、七日に及び。稀なる休暇なりければ。あバし心ゆるやかに覺へ。其日の夕ぐれに。夫婦端ちかう出く。咲かくれ

たる庭の白菊と詠め候。暮ゆく秋を惜む折しも。秋布が父博多彌四郎。馬と門内に乗捨て。瀬川が若黨村澤俊平に案内さし。連忙よく入来ると。主人の夫婦見かへりて。この思ひがけすどく。やと坐と立て迎れば。彌四郎上坐に押あがりて。吉次は對ひ執權の仰あり。謹んで聞れよ。太宰の經高謀及の聞えあるによつて。上總介實政ぬし。討手の大將を承て。今夜鎮西へ船と出さる。然るは實政頻に軍師と乞申はよつて。便吉次も軍監とし。實政の輔とし給はんと取り。いそぎ乗船の用意いささるべし。申傳る旨斯の如くと述べければ。吉次是を承て。近臣外様多る中に。弱輩の某かゝる仰と稟ること。およぬた身の面目。時を移さむ。用意致まべし。と回答する。秋布忽地うちあてれ。又思ひかへしけん。えからざる仰と稟給ひて。最歡しくこそと云。彌四郎は秋布が。心の中と推量して。聲と低し。吉次猛く西國へ赴くとも。已れ斯であるなれば。心の及ばん程に。扶持をべし。吉次も後安く思ひ給へ。ありのあれが女兒婚姻をふいて。僅ふ七日。忽地別離し及ぶ事親の愚痴であるべたが。懶くおもふを理ふなれど。又會難を別あらねば。只心と放して。待給へといひ

弥四郎
 瀬川ヶ家
 使
 時宗の命を
 傳ふ

若たうちやん平

あは

あは



博多弥四郎



慰るに。秋布の胸ふさがりて。果敢くく得應ず。吉次是と聞て。彌四郎にいへりたる
 其が寶母玉嶋弟浦二郎といふもの。松浦ありとは聞かど。三才の時別きてより。
 骨肉の義絶され生死の程も定りぬらず。今度彼地は赴れて。經高と征伐せば。事の急と以
 て。母と弟が在處とも尋べう思ひ候へば。あらぬ國へ行如くよ非ず。已れて心は勇あり。又
 村澤俊平の。心ざは信やりあるものなれば。留めおたて秋布が。身の護ともいさまべ。其
 餘の事。よろづ泰山の庇と蒙べと云に。彌四郎點頭て。女兒が事。いゆるはほでもお
 一。足下の元来忠孝の人なり。然れば神佛の擁護よよつて。比類なれ功名。寶母舎弟も
 環會給ふべ。云べた事の種々なれど。私ふ采れるあらねば。猶豫を難し。えや退るなり。と
 いひ果く席を立バ。夫婦是と送く。再び舊の坐敷よかへり。吉次聽て。若黨俊平と呼びて。留
 守の事を聞えおくに。彼肯すして云やう。僕幼きより。先君の庇と蒙れば。恩の爲は死べ
 一。と年采思ひて候に。危窮存亡の時。當て。斯宜ふいと本意おと。喧バ。吉次重ねて。汝
 が云所を。自己の志と舒るのみ。主の爲よせんに行と留と擇ことか。汝と留おらざれば。

己が心安からず。主は物と思ひをるが忠あらんや。在て思ひ留り候へとて。理を盡して
 ひ論せば。俊平の力及ばで。漸くに承引ぬ。吉次又妻お對く。火急の仰と承れば。心いそが
 しくて。細あうの聞えおらず。思ひ決せざることあらば。俊平に相語て。爺々れ判断おは
 一賜へ。と云に。秋布を涙さくみ。己の事。露バウりも思ひやらせ賜ふ。申すま
 て。よ侍らねど。一日く小肌寒。遣けた船路の答お寝。鉾を枕ふ給ふとも。みづから愛
 して身を保ち。逆臣を滅ぶ。母御弟君も環會。凱陣お給はん事をのみ。ねがはしく侍り
 とて。名残とともいへば。えふ。いぬぬさすが。武夫の妻と見えて。哀れあり。

第六

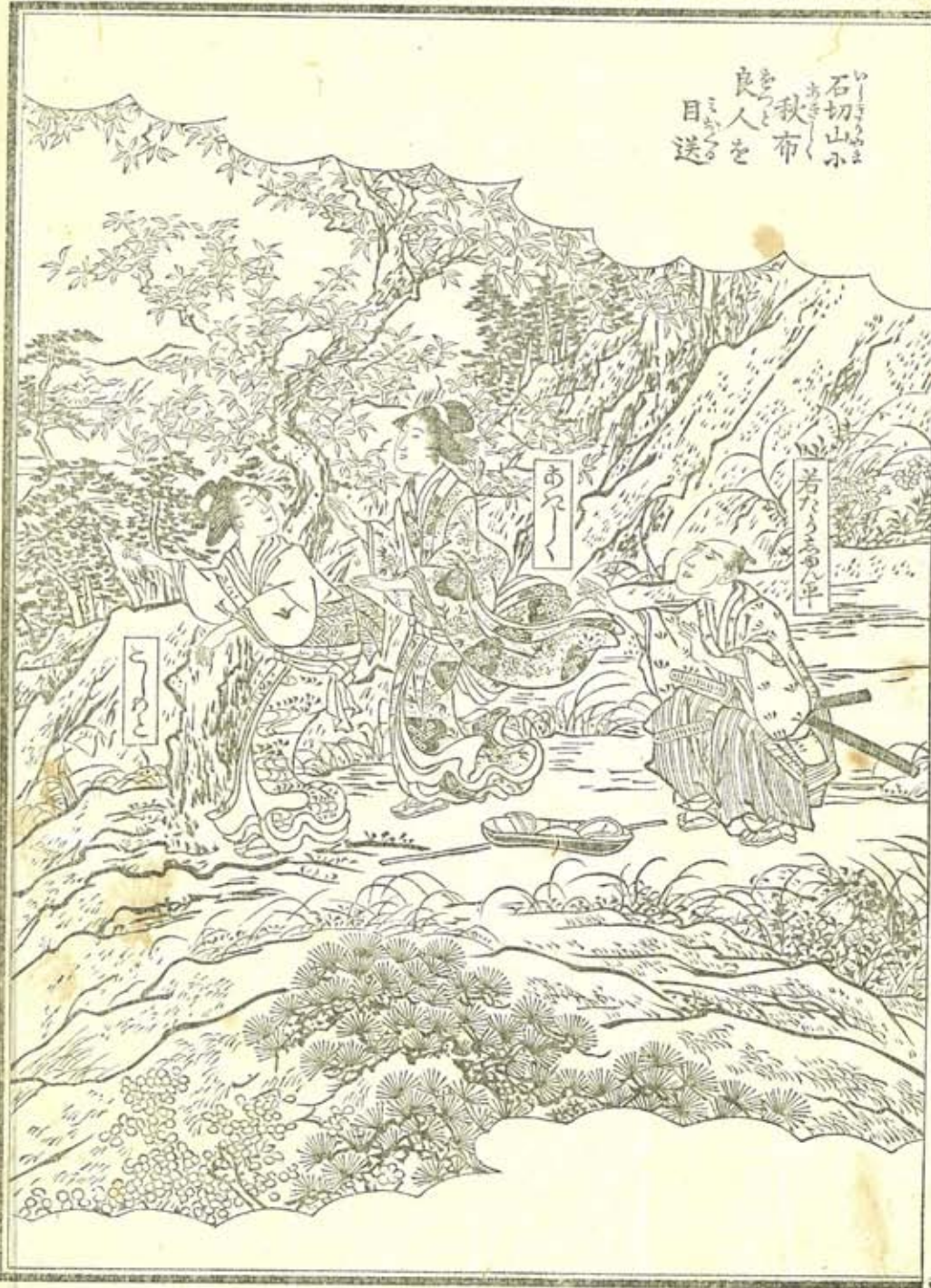
涙を含て節婦義男を送る

かくりける處。雜兵一人。喘々走り来つ。門内より呼々たる。總州(寶政といふ)を。今夜
 月と共に船を出して。西國へ赴け給はんとて。目今由比が濱。軍兵と集合給へり。瀬川氏
 いと遅。とく參り給へ。といひも果む。舊の道へ走歸れば。吉次遙ふ是を聞て。さて寶政
 今夜鎌倉と出給ふなり。やの後まじとて。衝と立あがり。日采床お飾る。父が記念の黒皮威

鎧を取て投かくれば。秋布のうひくく去く。拿手挽けた星亮と。雄手の脇よりさし出を吉次
亮の緒を締まき。まゝ秋布がさし出を。太刀さへ長旅路やとて。思ひを見あ己を妹と春の
別れの鐘の。曉あつて。入相の齋さやう取り。其際は俊平が月毛の馬ふ鞍おたて。搦づら近
く牽出を。程もあらせむ吉次が閃と乗て手綱搔操。秋布無事ふ。とゆふぐれ。入口と共
西の海に出船にあんと馳去れば。主に後まじ馬飼戦持。腹巻に小手膳當し。跡は跟て分
たりける。秋布の今さうに。云べたこといひ果す。聞くべき事も聞ざれば。いとゞ名残のと
いまれて。涙玉なまのみあり。が。思ひうひて俊平にいふやう。龜谷の石切山。由比が濱
と眼下に見る。直は彼處に赴。たゞ夫の船出に給ふを。外かぐら見まほし。たゞ。伴ひてよと
いろがせば。俊平聞て。げよえからざる別を去給へ。いとゞ遺憾がおぼまべた。折しも月
の甲夜より明し。いざ給へと應し。秋布やうやく涙をおさめ。女の童一人と將て。俊平
は。躰尋させ。石切山へ走りゆく。既に彼山の巔にもなり。盛り久し。たむら菊の花乃香
いと濃やうなれど。主従露と拂ひもあへず。由比が濱方と見己させ。浦ふく風も九月の

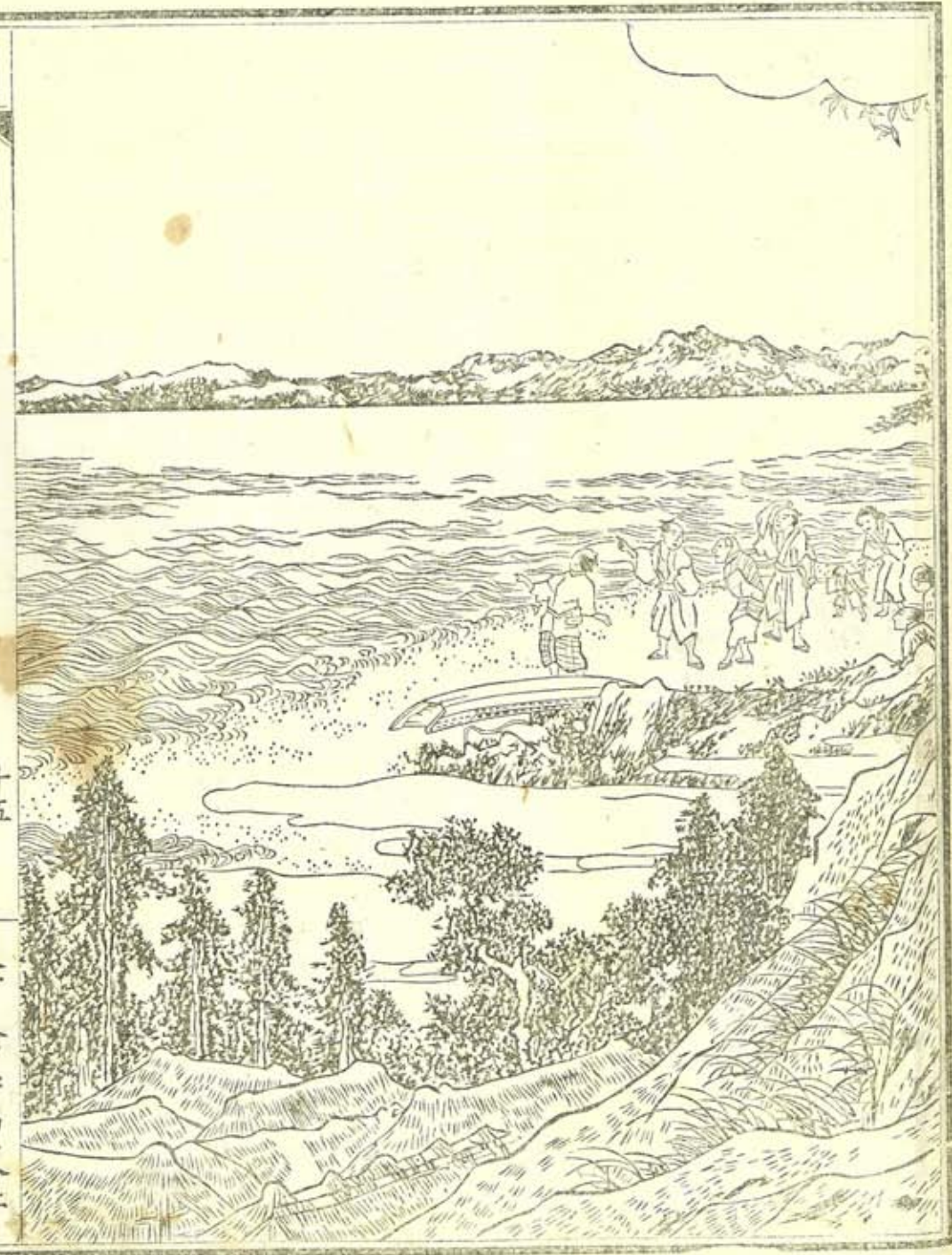
十三夜の月さやうまで。金波長く流きて。玉兔の走る事速く。濤浪近くうち寄せて。鷗鷁
の飛ぶこと稀あり。されバ實政の軍船。只今纜と解ぬと見えて。三鱗の旗濱風は。飄さし弓
矢打物と飾立さる。大船八九艘。棹の歌を唄ひはれ。遙は岸と離るれば。これを見んとて。老
弱男女。彼此の磯に集合たり。石切山よ。秋布が。見己させ。方眼もえ。己が夫の彼船う
この船うとて。措せど。それろとはあるよ。もぬく。えし乗後ま給はずや。嗚呼。心もとなしと
て。主従眉根と擧る折しも。裁許橋の東なる。延命寺の森の蔭より。鎧さる武者一騎。忽然と
走り出。濱方へ馬を馳ま。形容。措物は。色鎧の威毛。かんどこそ。定うに。見え己うね。天晴
雄々。た武者態の。備がふべくもあらぬ。その人あり。秋布のこれと見て。さては。後れ給ひ
た。このい。うよせま。とて。主従手汗握りけ。ともあらずし。吉次は。主君ふ。辭列を申
さんとして。執權の館へ参りて。時宗朝臣に拜謁し。直は退出。馬と走り。由比が濱。柔
て見れば。思ひの外。事後れ。船の既。岸と離れ。大洋。遙に。櫓ゆく。よ。吉次吐嗟。と。こ。俗
焦燥。この朽と。と。ゆ。沙。馬と。ぎ。ぶ。と。乗。入。れ。て。追。着。ん。ど。ぞ。涙。せ。さ。る。秋。布。主。従。は。こ。の

石切山
秋布
良人を
目送る



大和書房

東京金王出陣



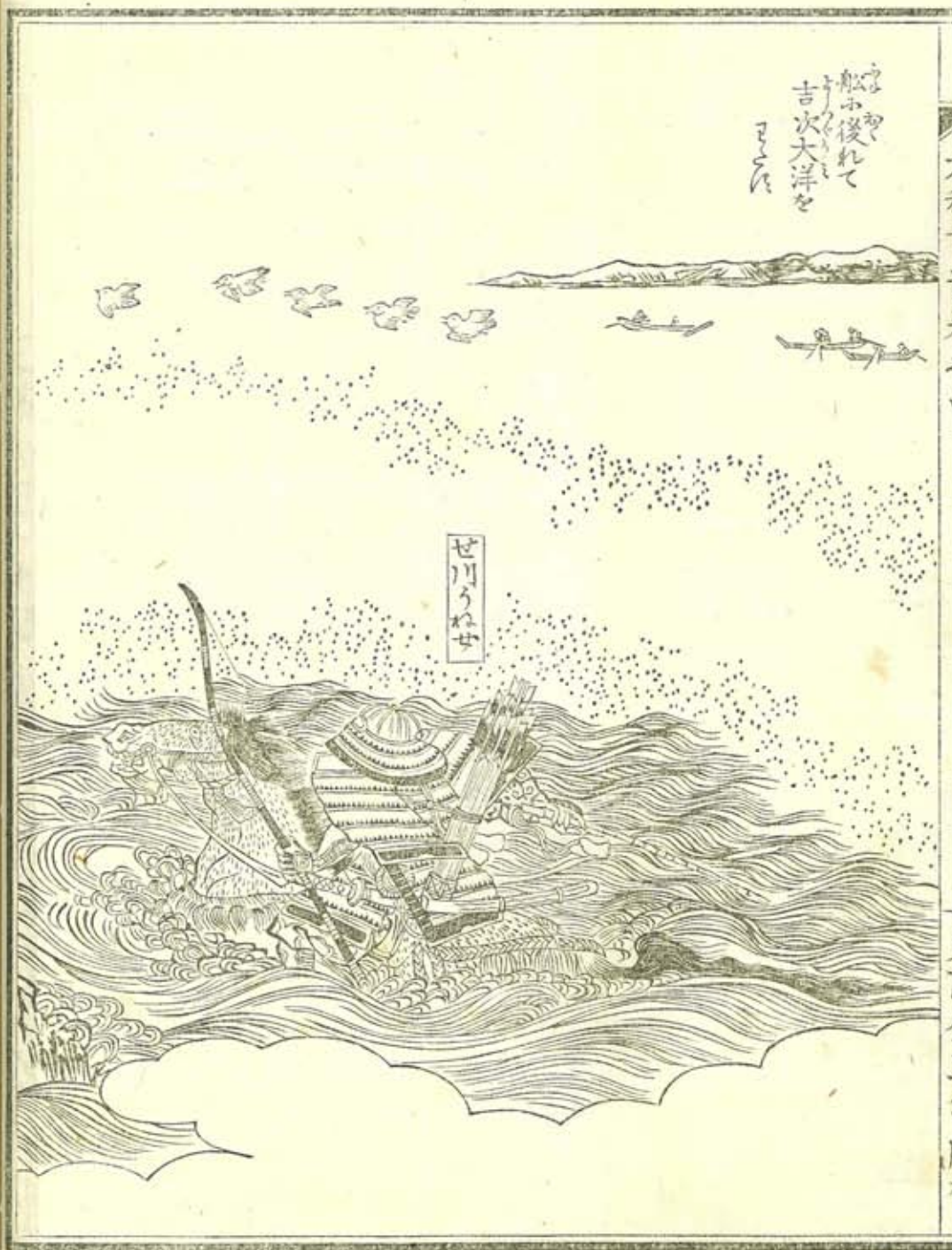
十五

東京金王出陣



実政の船

十六
東京大学出版会



船が後れて
吉次大洋を
こす

せ川うねせ

大和言部卷之中

東京大学出版会

形勢はほま〜詰み。いかに勇くおのゝるとも。暴虎馮河の悔あるべし。浪風あつた海上
 と。いつまでも追給ふ。押流されや去給はん。今も沈み給ふとて。これともあつても海ども
 に聲と限りよ呼び留れど。間違は速けき。と〜かぬもげふ理にあり。かゝる時よ神佛の
 冥助を仰ふまことおしと。主従こゝををひとつとして春日八幡住吉四社鏡の神社も曇
 なれ。誠と照らし給へとて。まむし丹精を疑へ。又海づらを眺望れば。神や守らせたまひ
 けん。吉次も。逆巻浪を物ともせむ。騎人の達者。馬の逸物。人と馬と力と戮して。船近く乗
 つけたり。寶政の。嚮よりこの形勢と見て。大に詰み。あれ吉次と助よとて。船と〜へさせん
 と下知をる。軍兵。影うち乗る大船を。速ふ船かへをべくもあらねば。終は思ふは海
 一得ず。看々可惜。壯夫を殺せしことよと。咳たさる。吉次辛うて乗着しか。ゆるく歡び。馳
 て人馬とも。船は扶のほさし。信やうに勲れば。吉次の。執權へ。身の暇を申せし。間ふ。思ひ
 の外後きたるよと述べれば。寶政聞て。まかろば其許の懈まるよにあらず。目今の爲体と見
 る。盛綱が藤戸を渡せしに勝れり。船出のこの黄昏過よと定る。潮と風との便宜あれ

バ。久ま〜待あゝるることと得ざりし。こゝともて心の外に。大に其許を勞せしとて。他事取
 ちきほみ聞えけり。されば浦曲なりける見物の良賤も。吉次が大洋と渡せし。試稱どよめた
 ておのが家路は立ちへまむ。吉次が從卒等の。海を渡をによしかなれば。陸地より西國へ赴
 け。秋布主従の。石切山より吉次が船は乗得ると見て。やうやくよ心おちあされど。船の
 跡なくぬりゆく。秋布いと〜こ、海はそくて。村澤俊平よいへりける。ものよいか取
 りす因縁あり。己が身のこの石切山なる望夫石のほとりにて生れ。良人の又松浦ぬる。鏡の
 神社の祈子ぬりとす。さればよ。今宵の景迹を。唐山の望夫石。吾國の領中。磨山の。俤は似
 て。己が悲みの。いよしへの松浦佐用。嫁も勝るべし。會者定離とい云ながら。會ことか
 く列る。よ。易たの。浮世なりけり。とて。聲と惜ますよと泣。俊平これと慰めて。きほ〜
 云こしらへ。やがて麓へ下りける。

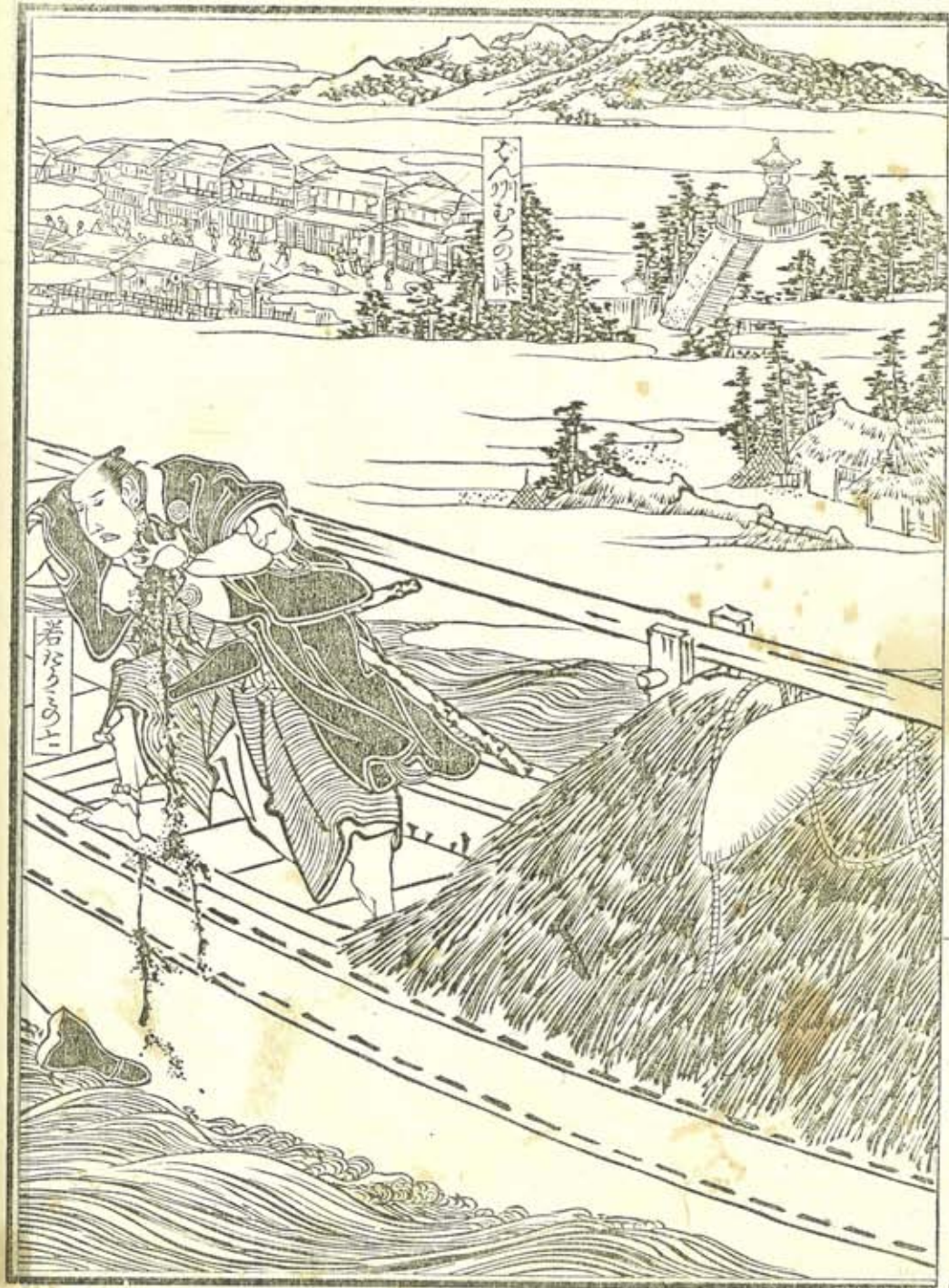
第七

海濱は書と失ひ書と得たり

秋布の。夫吉次が西國へ赴たてより。既に五六十日と經されども。絶て一度も音耗なく。冬も

えや半を過て、長た終夜いも寝られぬ。ほどほまぬ曉よ。入る月を詠めて、鎮西の方をつ
 かりくはくく、と孤燈は對ひては、吾影おろて友もぬく。只管は思ひ得そりしかば、父の彌
 四郎これと見て、最こゝろもとなくおぼえ、毎日若黨關兼七と違ひして、その安否と問せ
 けり。この兼七も、秋布が幼た時より守傳たさるものなれば、俊平よりは、心くほかく思ふ
 から、秋布の彼が来る毎に、夫の事のいひ出く、不覺ふ落涙をさりければ、兼七の其心中と
 推量、かくまでよかもひくし給ひて、不應の事あらば、いづよせん。僕、潛は父上、聞えあ
 げ。近たは西國へ行くべし、消息なんど、豫く寫めおた賜へうしと、信だちて聞ゆるまで、秋
 布斜おらず歡びて、その彼地へ赴たて、面あさり、己が夫の安否を問ひ、これにまを心や
 りのあらう。父の氣色よろし折と窺ひ、申しこしらへてたべといふ。兼七のこゝろ得果
 て立かへり、其夕、主君彌四郎の件、事状告ふけき、彌四郎もさすがに恩愛のやるかさか
 く、余りの女兒が思ひ細りて、長た病着、臥もやするとして、心安からざる折なれば、今兼七が
 西國へ行んといふと聞て、竊に歡び、私に戰場へ消息をいさそ事、我ありての許がさし。も

一汝が心ひとつよて行んとおらば、我の志らすすが得よてあるべし。と回答しかば、兼七畏て
 その夜、又瀬川が宿所へ赴た。秋布は彌四郎が云しことと聞え、あらし、か、れば翌を勉めて
 旅立候べし。書簡かど寫めをた給ひ、目今通與給へと云ふ。秋布大に歡びて、豫て便あらば
 送らんとて、毎夜手づり織りし、錦一卷と十尋も餘るべく見ゆる。書簡一封をとり
 出し、又口づり云べた事を、丁寧云ふ。又一封の金と、一裹の丸薬をとり出して、こ
 れと兼七に錢別し、その今ゆたて、いつの程より歸り来べたか問は、兼七もはし、僕へ
 今茲もおほ四五十日のあれど、路遙なれば、年の内にも覺つらふ。正月の上旬ふ、必ず
 歸り候べし。回答えて、書簡と錦を受とり、金と薬と給ひりて、聽て宿所へ走りかへり。
 俄頃、行装を整つ。八聲の鶏とも夜とも、西とさして立出ぬ。こゝろ又瀬川嘉二郎武
 行、長城野兵太、敦宗の、去年の冬、鎌倉と追放れ、些の貯積と命綱として、伊豆の山中に
 是住ミ、嘉二郎が奴隸勤バと、とりく潜やう、鎌倉へ遣して、事の爲体を窺せ。瀬川采女
 が秋布を娶りし事、又今度實政に従ひて、故人西國へ赴たさるよしを傳へ聞て、嘉二郎の



天の明るは待給へといふ。兼七聞て大に歡び。やがてその船に乗りて。夕餐たうべなどするに。日既暮つ。乗合の旅客等。室の遊君が夜の粧粉を見んとて。陸に上りぬ。元來財と積。船ちねバ。船人等も。甲夜の程。郷にゆきて。酒も遊むんど。兼七ひとり。残るかたて。船はあらむをかり。兼七の只ひとり。宮漏月と瞻るふ。さち渉る浪の文字ならで。繪島。松嶋。さんり。鞍掛の島々の。筆手歌繪に似たりけり。渾く此津の。明石の瀬湊。續きく。こよなを眺望なれど。急ぐ旅なれば。それ心も留す。月の冷しく。浦風は甚寒ければ。宮引被ぎて目睡ぬ。さても。兼七が奴隷勤八の。いぬる日より。兼七が跡を追ふて。やうやく和泉の。跡ふて。追着されど。その便宜と得されば。おぼしき路も取れり。この夜。兼七が船に乗ると見く。大に驚事。既ふこゝに及べり。今宵手を下さむ。彼を遂に討もすべしとて。甲夜に影の旅客にうち雜る。彼ふふ乗り。船中の闇き處に。隠居て。息もせず。聞ふことや。久し危を。兼七を。こが外ふ人ありとも。あざりければ。心と放して目睡ると。勤八。潛ふ張見く。その時分の今ありとて。やと。船中よりえひ出く。はづろの行装を奪ひと

つてこれと脊負ひ。あづろふ刀と引抜く。兼七が咄のあざりを。板子も徹きとぐさと刺す。兼七。忽地驚覚。吐嗟と心おどろたがら。元來。駭ぬ男なれば。息絶。さぬおも、ちして。その刃に心とつくれば。幸よして。多所外。刃方外。向くあれば。丁と反切。身は起し。矢庭に刀。執奪。いんと。まると。勤八。大に驚かて。奪きと争ひ。遂に敵一がとければ。刃と捨く。水中へ。跳入らんと。まると。兼七の。刀。取て。閃く。勤八。鵬より。乳の下かけて。切つければ。阿呀と。一。聲。叫びも。あへず。鮮血。さつと。潰り。真逆。さま。陥り。浪の底。まで。沈みける。兼七の。既。敵と。討と。めたま。其。身も。大事の。深。痕。なれば。猛。目。眩。船。建の上。倒。き。忽然として。息絶。さり。去程。その。夜も。更。闇。て。旅客。人。庶。共に。歸り。来。つ。と。見。れば。船。は。残。る。る。旅客。が。血。を。塗。れて。臥。た。れば。こ。い。そ。も。い。う。ふ。と。驚。た。さ。ぬ。ぎ。さ。ほ。く。ふ。勤。る。ふ。氣。息。を。こ。い。か。よ。ふ。や。う。ぬ。れ。ば。さ。て。い。い。ま。ど。碎。切。れ。む。と。時。と。移。さ。を。醫。師。と。招。た。よ。し。内。外。の。療。治。手。を。竭。して。もの。ま。る。ふ。や。う。やく。救。ふ。事。を。得。たり。船。人。等。この。形。勢。と。見。く。か。れ。ば。こ。の。人。は。船。に。乗。し。く。西。國。へ。赴。ん。事。か。な。ひ。が。し。と。兼。七。と。船。長。が。家。に。托。も。く。ゆ。た。て。保。養。

さしその夜の中は船と洗ひ浄めおどし。詰朝籠を解りどろ。かくて兼七の。肝長の家
 あり。療治は加ふる。主人の情あるもの。よ。信やう。勸りしか。第三日は至
 り。粥をど。聚るやう。なかりつ。かく。又十日あまりを。瘡口をこし。愈はけ。いまだ
 起居の自在ならず。是は主人が情。絶なんとせし。玉緒と。兼七のぬるく
 その庇と。歡び聞え。え。め。己が名と名告り。路銀の半と。主人は贈り。榮利は。さ
 いふやう。彼夜さり。船の中。己が行畏のあり。内。西國へと。くる書状もあ
 り。咽喉と。傷ま。且くもの。といひ。さ。こ。ろ。は思ひ。得問ざりし。預りおた
 給。こ。さへ。通與給ひね。といふ。主人點頭。げ。彼行畏の事と。忘れ。さ。進
 まべし。といひ。納戸より。一つ。袂包と。引提。是なるべし。よく。展見。受とり給
 へ。といへ。兼七見。眉根と。擧め。こ。似たれども。己が物にあらず。といふ。主人も。又。不審
 と。いぬる夜。船と。洗。乘あ。せし。旅客の行。悉く。展見。れど。御身が。搭物
 と。ね。は。し。た。この外。か。う。り。し。といふ。兼七聞。い。よ。怪。その。袂包。うち。開。は。雨

衣一つと。濟然やうの物の。もあり。もしその。主を。える。すが。とも。ある。書物。や。ある。と。て。うち
 返。く。まる。紙の。間。一。枚の。文書。あり。是。す。ち。鼠川。嘉二。郎。が。奴。隸。勘。へ。と。らし。と
 る。手形。よく。今。度。兼七。と。殺。秋。布。が。書。簡。と。奪。ひ。と。つ。米。さ。ら。ば。あ。う。く。の。賞。祿。を。與。ん。又
 瀬川。博。多。が。自。滅。さ。う。秋。布。と。奪。ふ。に。空。ら。ば。如。此。く。は。賞。祿。せ。ん。と。書。たり。け。さ。兼七。大
 驚。た。こ。活。の。中。に。思。ふ。や。う。己。は。傷。は。け。さ。る。もの。は。海。賊。あり。と。おも。ひ。し。よ。さ。て
 嘉二。郎。が。奴。隸。ま。て。あり。々。か。れ。ば。己。が。う。へ。の。み。あ。ら。ず。主。家。に。大。事。出。采。ぬ。と。心。頻。り
 に。安。から。ね。ど。さ。も。な。た。おも。ち。して。彼。手。形。と。巻。り。へ。し。主人。を。見。り。へ。り。て。い。ふ。や。う。この
 袂。包。を。己。が。物。な。ら。ね。ど。は。ろ。く。縁。故。と。考。る。に。わ。が。行。畏。の。彼。夜。さ。り。盜。賊。が。奪。ひ。と。つ。く。
 支。黨。小。通。與。さ。る。う。さ。も。な。く。ば。う。の。もの。が。み。づ。か。ら。背。負。た。ら。ん。と。わ。れ。あ。ら。を。し。て。水。中。へ
 秋。こ。も。し。程。ふ。彼。包。も。諸。とも。ふ。底。の。水。層。と。や。かり。けん。今。日。と。經。さ。れ。ば。舊。の。水。底。ふ
 がある。べ。う。ら。ず。包。れ。う。ち。ぬ。る。わ。が。物。も。あ。ら。ず。人。より。預。く。も。く。ゆ。く。な。れ。ば。失。ひ。て
 面。を。た。所。爲。へ。とい。ふ。主人。か。う。く。と。う。ち。笑。ひ。あ。う。ら。ば。その。袂。包。に。盜。賊。が。船。ふ。か

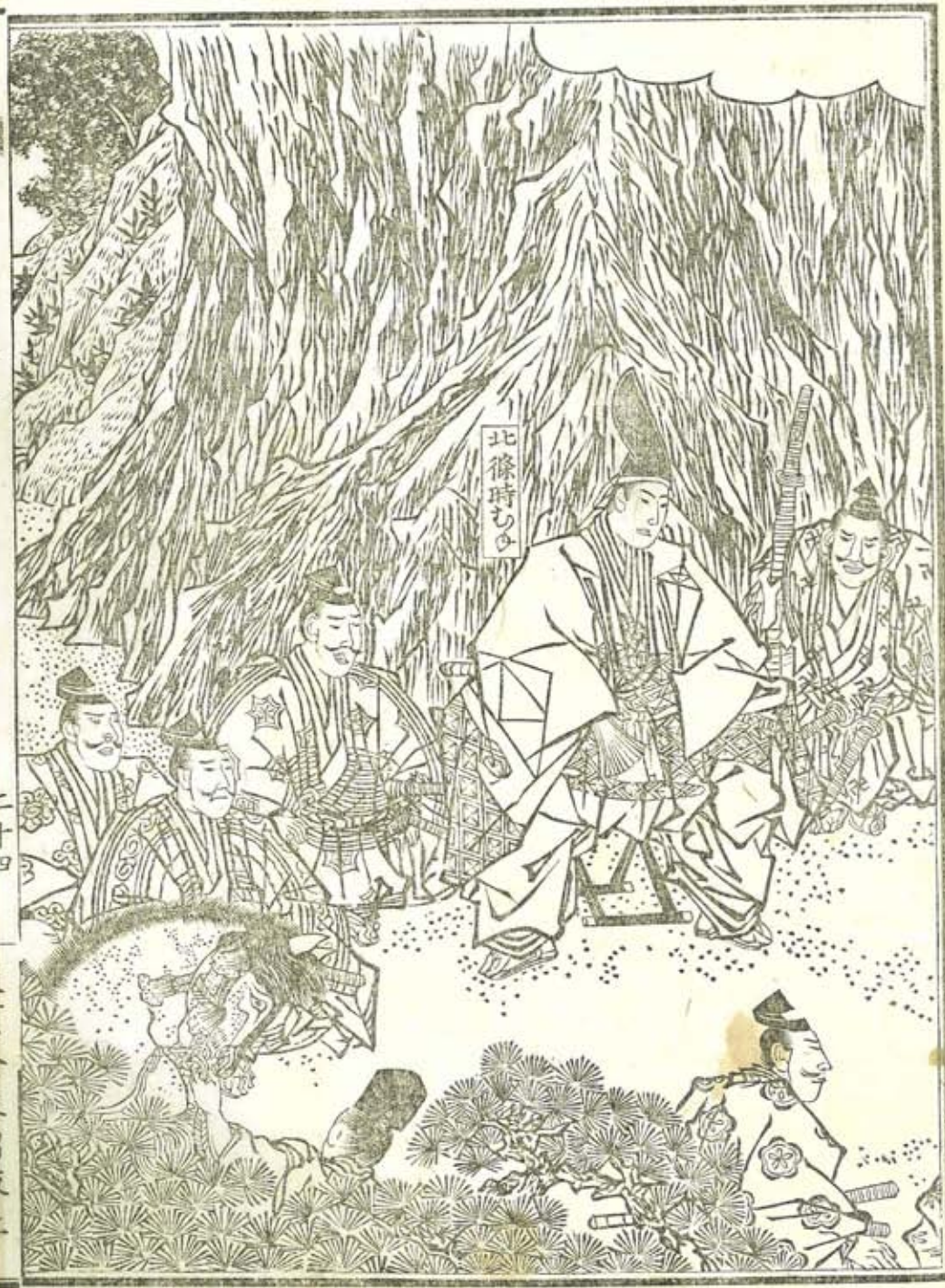
きたるものふこそ。御身今度の厄難ふく人の物と捨給へども。命と拾ひ給ひしう。これふ
 ます僥倖いふ。立歸りて。縁由と告給ひ。その主もいうて。恨給ふべき。といひ慰めて。
 やげて外面へ出ふたり。こゝふ于て。又一層の劬勞とまゝて。ぬさ、び思ひめぐらほ
 ふ。これ今錦と書簡状失ひて。往ても還りてもいひ諱ふ。まうおれど。今えかろども。嘉二
 郎が手形と得。主君の大事とあるうへ。一日も躊躇あがさ。金瘡全く愈むとも。ほづ鎌
 倉へ立歸りて。主君へこの手形と見せまゐらせん。又西國へ赴た。婿君へや告申さんと
 て。ときほかうさま思ひ煩ふ程。痰口ぬさ、び瘰癧。苦痛えづめに彌ま。ければ。又いさづ
 るに日と過しぬ。

第八

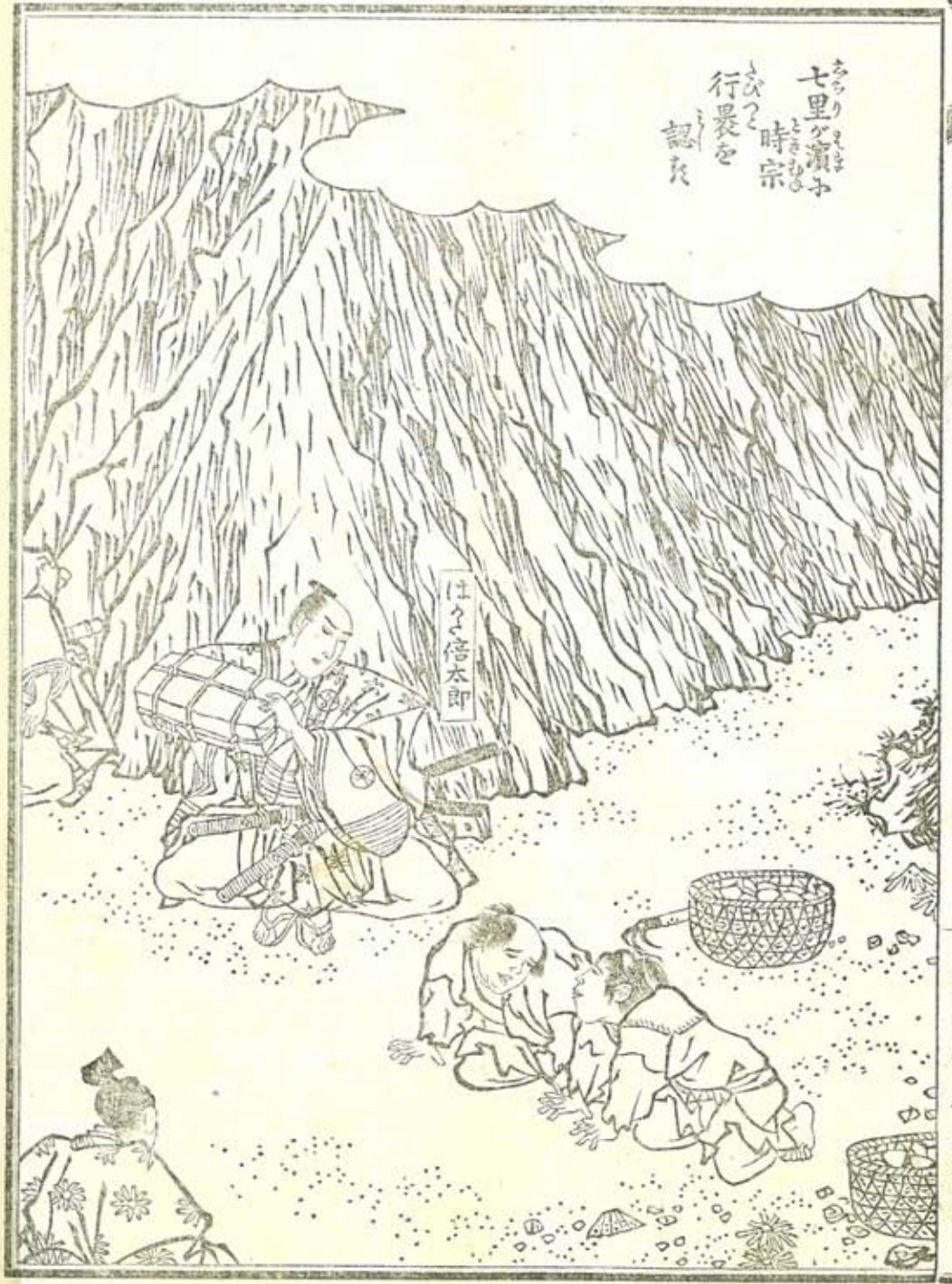
錦繡の和歌邊將と召

今茲も既ふ暮て。あつたまれ春立かへり。鎌倉ふは。執權時宗朝臣。太宰の經高。誅伐の祈願
 として。博多倍太郎以下の近臣と召俱。榎嶋辨財天へ參詣あつ。七里が濱と歸り來給ふ
 に。海士の子どもうと見え。羊の程十二三才な。若男の童二人。油紙ふ裹さる。行畏とれば。

一丸ものと引あひは。あつたまれのよ。いふおのれころ。えづめに見出し。たれば。こゝへ
 連與せとて。罵り争ふ。時宗遙ふ見をな。て。ま。一馬の手綱を。博多倍太郎ともて。
 二人の童と近く呼。て。うの故を問給ふに。童どもは。執權ふりと見奉りて。大に畏り。えう
 ぐ。く。四答申さ。ると。時宗みづ。う。町亭ふいひ諭。て。問たまへ。彼等やうやくに
 まう。ば。う。目今彼首の職。ふて。貝と拾ひて候。ふ。は。か。らす。も。この行畏。が。浪。ふ。打。よ。せ。う。れ。う。
 ぼ。と。り。近。う。来。り。と。お。の。れ。先。ふ。見。出。し。彼。後。ふ。取。あ。げ。さ。れ。ば。こ。な。さ。へ。連。與。せ。連。與。さ。と。と
 て。い。ひ。争。ひ。と。控。ふ。て。候。と。申。せ。う。う。ば。時。宗。件。の。行。畏。と。召。よ。て。見。給。ふ。ふ。細。き。麻。糸。も。て。
 縦。横。ふ。か。ま。り。た。る。が。小。丸。木。札。を。つ。けて。肥。前。國。矢。田。津。の。陣。中。東。軍。の。軍。監。瀬。川。采。女。ぬ。へ
 寄。奉。る。抽。婦。秋。布。と。あ。り。け。き。ば。時。宗。や。が。て。この行畏。と。博。多。倍。太。郎。ふ。預。さ。ま。ひ。て。童。に。宣
 ふ。や。う。途。に。遣。さ。る。もの。な。り。と。も。私。ふ。拾。ふ。事。う。い。それ。と。私。ふ。拾。ひ。て。こ。が。物。と。す。る。罪
 い。と。ふ。り。一。汝。等。の。童。な。れ。ば。あ。れ。ま。へ。す。も。あ。る。べ。し。この後。も。か。ゝ。る。事。あ。ら。ば。村。長。ふ。申
 せ。よ。彼。行。畏。も。その。主。の。姓名。と。記。し。て。あ。れ。ば。あ。か。さ。よ。り。返。し。は。う。い。て。ん。な。ふ。に。許。す。に



北條時宗



七里ヶ瀬
時宗
行装を
認る

はぐ倍太郎

とく行ねと仰せれば。童どもいよいよ畏く鼠の避るがごとく走り去りぬ。かくて時宗朝臣の節婦歸りたまふと。やがて博多倍太郎。行装を解ひらかして。見給ふに内に秋布が夫へ贈る書簡一封と。錦一卷ありたり。潮垂ると。まづりに乾さして。まづらの書簡は讀し給ふ。文章は雅たる。いふもさうあり。離別の悲みと述べて。山舞影遠くして。鏡と分の恨と記し。獨居の懶を舒て。蝙蝠聲をうして。扇は題するの例をいへり。その辭悽惋と。ものがかうく。うの情親切より。艶あらず。これを聽もの。落涙せざるにか。時宗又かの錦と見給ふに。尋常は織さほ。いあらむして。百首の和歌と織あ。さるが。その雙の巧なる。その歌は妙ある。まべく人の及ざると。洩されば。時宗頻ふ感心あつて。博多倍太郎は宣ひける。い。むう。異域唐の會昌年中。邊將張搔が妻の侯氏。夫が任ふあることの久し。糸を數た。回文を誇りて。龜形の詩を作。又晉の竇滔が妻。蔡文姬。文旋圖の詩を錦に織入。夫が秦州にある。贈きり。今の秋布。己が邦の若蘭侯氏といふべし。渠吉次。小齊眉こと。僅ふ七日。忽地は別きより。夫の生死の場あり。再會の量が。己を悲むこと。い

と不便。えやう吉次と召りへして。秋布がころを安んじ得させん。いと宣へば。倍太郎答まう。はや。仁君上。在を。彼等が身より。莫大の思惠。不思議の僥倖なり。あうれどもこの事よ。よつ。吉次を召還さんと仰ふ。秋布が父彌四郎。恩愛は溺き。忠義と缺も。のみあらね。世の讎をおもひ。婿の思。んと。こ。洩と。差。固辭まう。は。た。敷。又秋布も。貞操ある。女子なれむ。却心。う。く。思。ひ。候。べし。よ。や。彼。親。子。の。え。の。固。辭。申。さ。す。と。も。吉。次。も。一。その。妻。の。戀。慕。よ。よ。つ。く。召。か。へ。さ。る。と。あ。り。ぬ。が。ら。い。う。て。う。阿。容。く。と。立。歸。り。候。べ。た。歸。ると。た。い。世。の。胡。應。と。な。り。歸。ら。ざ。れ。ば。君。の。命。違。は。ん。事。と。恐。れ。忽。地。は。討。死。い。と。ま。べ。う。も。や。あ。ら。ん。世。言。は。心。あ。つ。く。花。を。裁。れ。ば。花。活。す。意。あ。く。く。柳。と。挿。べ。よ。く。陰。と。い。ふ。こ。と。あ。り。得。と。賢。慮。を。め。ぐ。ら。給。へ。う。と。憚。る。氣。色。も。あ。く。ま。う。せ。う。バ。時。宗。朝。臣。か。さ。ね。く。宣。ふ。や。う。汝。が。申。す。と。こ。ろ。甚。理。り。は。稱。へ。り。あ。う。い。あ。れ。東。軍。數。千。騎。の。中。よ。り。吉。次。只。一。人。と。召。う。へ。す。い。九。牛。が。一。毛。ぬ。り。一。將。口。得。が。さ。し。と。い。へ。ど。も。實。政。の。軍。配。は。千。く。お。ぼ。つ。う。な。た。所。あ。し。且。秋。布。い。己。が。母。の。愛。さ。た。もの。お。お。ぼ。を。お。託。あ。う。る。は。彼。女。子。哀。慕。は。堪。ず。し。て。世。と。去。る。こ。と。

もあらば。さこそ不便はほまらぬ。時宗が母と思ひ奉るも。秋布が夫と思ふに。恩愛あへて異なることなし。慰ふ。明白はいひまらしてこそ。彌四郎秋布も因辭まう。吉次も歸るべからむ。妻も舅もあらせしめて。猛に吉次と召うへさん。彼又何の故ともあらず。違背せんやうにあらず。この使を委んぬもの。汝あらず外ふなし。急ぎ彼地は起たぬ。吉次は將と參れり。仰するより。倍太郎不覺に感涙と押り。貞婦忠臣の下ふ出るも。賢君上は在まが故かり寔に彼等も。よき月日の下ふ生れぬ。かくおわけなき仁愛と蒙り奉るよ。とまうして。異議なく領掌あざりし。時宗やが。件の錦を直垂に縫いて。秋布が書簡と共に倍太郎に授。汝彼地ふ至らば。この直垂と吉次は與へ。己が命と傳へ。又書簡に假初もて采りしおもちして。どまけ得させよまらば。吉次聊も疑をて。汝ととも歸り来すべきなり。と宣へば。倍太郎承る。件の二品と受とり奉る。俄頃に行装と整る。從者のいとやつし。次の日鎌倉と起行し。馬の頭と西に向。夜を日は繼で馳りたる。この事世は披露ありし。瀨川博多が家告るものもあらず。秋布は春よりても。兼七が歸り来

されば。いよくころもどかく思ひ。寢食と安うせず。病がちよて日をおくれ。俊平もこの故に心と痛め。父の彌四郎の。女兒が爲に。鶴岡の八幡宮へ參詣して。驚の羽は征矢二條。願書と添へ奉納し。賊徒速に誅伏せ。吉次は恙なく。凱陣あらせ給へ。と祈りぬ。げや。武夫のやとけ心も子に引き。心よいくもかりぬべし。されば神に誠ある人守給へども。宿因の禍に救ひ給ふは由なきや。この願書より事起して。彌四郎が身と喪ふとい。後ふと思ひあはされ。を託。

松浦佐用媛石魂録前編中終

